

平成29年度 自己評価実践報告書

学校名 福島県立梁川高等学校

I 自己評価の概要

1 平成29年度『学校経営・運営ビジョン』（別紙1）について

生徒一人ひとりを大切に、社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力の向上を図り、希望する進路の100%達成を目指した。さらに、「知・徳・体」の調和がとれ、社会に貢献できる人材の育成を目指し、地域から信頼されるとともに「梁川高校で学んでよかった」と言える学校を重点努力目標とした。

2 校内組織体制について

(1) 組織

学校評価委員会は、昨年度と同様に各部長・各学年主任からなる運営委員会がこれを兼ねることとした。

(2) 学校評価委員会の役割

学校評価委員会の役割は、「『学校経営・運営ビジョン』の作成」、学校評価計画案、調査用紙案、調査結果に基づく改善原案作成など「学校評価に関わる各種原案の作成」、「各種資料の収集、整理、保管とその提供」、「その他学校評価に関わること」とした。

3 自己評価年間計画について

(1) 平成29年度学校評価年間計画表（別紙2）

(2) 作成のねらい、意図

『学校経営・運営ビジョン』の提示を年度当初に行い、「自己評価概要」の1年間の内容を明確にした。「各段階」（計画・実践・中間評価さらに実践・年度末評価・改善）の時期と年3回開催の「学校評議員会」を位置付けた。また、保護者・地域住民の意見を反映する目的で、公開授業の回数を年2回とした。

(3) 自己評価年間実施状況について

『学校経営・運営ビジョン』について、4月の生徒会総会、PTA総会で生徒、保護者にそれぞれ公表・説明を行った。

12月には質問紙による方法で年度末評価を行うための資料を収集した。教職員は、定例職員会議にて、生徒には、LHRにて、保護者については、生徒を通じて質問紙の配付、回収を行った。質問紙の集計結果を「別綴1」としてまとめた。その資料を基に『平成29年度自己評価実践報告書』を作成して問題点の整理と改善策をまとめ、学校評議員の意見を聴取した上で年度末評価を行った。

今後は、年度末評価における成果と課題を考慮しながら、次年度の『学校経営・運営ビジョン』を策定していきたい。

II 評価結果の概要

1 実施方法等

項目	年度末評価			
	実施部署	評価	実施方法	コメント
教科指導	教務・進路指導	A B C D (E)	質問紙による	有
教科外指導	生徒指導	A B C D (E)	質問紙による	有
学校運営	教務	A B C D (E)	質問紙による	有

項目ごとに教職員、生徒、保護者に分け、アンケート及び学校評価を行った。

2 アンケート及び回答数

	中間評価のためのアンケート			年度末評価のためのアンケート		
	対象数	回答数	割合	対象数	回答数	割合
教職員	22名	22名	100.0%	22名	22名	100.0%
生徒				141名	139名	98.6%
保護者				141名	114名	80.9%

教職員は、全員が自己評価をするという観点から回答率は100%である。生徒については、141名で実施した。回答率は、98.6%であった。保護者については、昨年度の回答率67.3%を大幅に上回り、ここ数年で最も高い回収率となった。また自由記述欄に回答した生徒・保護者は27人であった。

3 評価基準について

評価	A	B	C	D	E※
評価規準	よく当てはまる (そう思う)	少し当てはまる (少しそう思う)	あまり当てはまらない (あまり思わない)	全く当てはまらない (全く思わない)	わからない

※保護者のみに設定

評価基準を奇数段階にすると評価が中央値に集まりやすい。よって、教員と生徒についてはA～Dの4段階評価とした。また、保護者については、小中学校と比較すると来校する機会も少なく、子どもに手がかかからなくなることから「わからない」との評価規準を設けた。

4 年度末評価のまとめ

(1) 年度末評価実施の目的、意図

教職員、生徒、保護者を対象に行った。結果について客観的な数値による分析を行い、「開かれた学校」、「より特色のある学校づくり」を目指し、お互いに忌憚のない意見を出しながら、学校全体、あるいは各部署で今後の対応策を検討していくことを目的とした。

(2) 年度末評価結果の分析、及び結果概況

○学習面について

- ・ 「分かる授業・充実した授業に努め」、「学習内容が生徒に身に付くように指導している」と自己評価をしている教員は100%である。
- ・ 「授業内容や進度への満足度」について肯定的な評価が教員で95.5%、生徒で87.8%と開きがある。
- ・ 「基礎学力の定着を十分にしている」について肯定的に評価している保護者は88.5%である。

○生徒指導面について

- 分析1 95.5%の教職員が、生徒の悩み事に親身になって相談に応じていると評価しているが、4.5%の教職員と17.3%の生徒がそうでないと回答している。
- 分析2 100%の教職員が、先生と生徒の対話の時間が十分に確保されていると評価しているが、18%の生徒がそうでないと回答している。
- 分析3 100%の教職員が部活動の活性化が図られていると評価しているが、28.8%の生徒は積極的に参加していないと回答している。
- 分析4 100%の教職員が生徒会本部は自主的な活動をしていると評価しているが、26%の生徒は生徒会活動は活発でないと回答している。

○進路指導面について

- ・ 教員は生徒の進路意識の高揚を図っているという意識が高まっており、進路目標をしっかりと持っているという回答している生徒が全体としては増加したが、約20%の生徒は進路目標が明確ではないと回答している。
- ・ 進路希望に応じた個別指導が充実してきており、各種検定に向けた取り組みも積極的に行なわれている。
- ・ 保護者の意識として、教員が親身になって進路相談を行っているという意識が減少傾向にある。

○いじめについて

- ・ 教員はいじめの未然防止、早期発見に積極的に取り組んでいると考えている割合が多いが、生徒、保護者は教員に比べ「少しそう思う」と考えている割合が多い。また、保護者は他の質問項目に比べ「わからない」と回答した割合が多い。

(3) 重点努力目標に対する達成状況等

基礎的・汎用的能力の向上については、普段の授業の中で各教員が分かりやすい授業に努め、生徒の満足度も上昇していることから、概ね達成していることができる。

進路希望達成100%については、比較的早い段階で達成できたが、次年度は生徒が第一希望に掲げる進学先、就職先に合格することができるよう学年と進路指導部で連携し全力で取り組んでいきたい。

生徒の授業、学校生活に対する評価は年度毎に上昇しており、「梁川高校で学んでよかった」と言える生徒が増加してきていると考えることができる。

(4) 分析に基づく次年度に向けての改善点

(2)の分析に基づいた改善点は次のとおりである。

○学習面について

学習について、多くの生徒は満足感を持ち授業に積極的に参加しているが、満足できていない生徒が少数いるのも事実である。少人数の強みを生かしてさらにきめ細やかに指導できるよう努めていく。

○生徒指導面について

分析1 面接時間を効果的に活用し充実させる。生徒の変化に素早く対応し、担任を中心に個別に面談する機会を作る。

分析2 朝の登校指導、昼休み、放課後等の時間を活用することで時間を確保し、より多くの生徒に声掛けを行う。このとき生徒の変化を的確に捉え、迅速に生徒の相談にのることで生徒理解に努める。

分析3 生徒が積極的に参加できる環境づくりを工夫することで活性化させる。

分析4 間違いなく数年前の状況に比べれば自主的な活動が増えてきているが、生徒に活動状況が見えにくいところがあるため、現在よりも更に積極的、自主的活動を生徒会顧問と協力しながら進める。

○進路指導面について

- ・ 生徒にしっかりと進路目標を持たせ進路希望実現のために、各学年と連携を深め、HRや総合的な学習の時間の目的を明確にして実施するようにする。
- ・ 生徒の進路希望実現に向けてきめ細かな個別指導をさらに充実させ、就職・進学試験における筆記試験に向けての対策を強化する。
- ・ 進路希望調査の形式を工夫し、保護者の進路に関する意見をとらえられるようにする。

○いじめについて

- ・ 教員と生徒、保護者の意識の差が大きいことからいじめ対策委員会で意識の差がどこで生まれるのかについて話し合い対策を考えていく。

III 広報の概要

1 目的や意図

今年度の本校の重点努力事項を周知させるために、年度当初より生徒集会で生徒へ、またPTA総会で校長より保護者へ説明を行った。

また、中学3年生を対象とした体験入学や中学校での進路説明会等で、本校の方針について説明した。

2 実施計画、及び実施状況

年度末評価については、第3回学校評議員会終了後、次年度の改善項目を検討しながら平成30年度『学校経営・運営ビジョン』に反映させる。HPにも掲載予定である。

3 配布状況、配布時期、配布方法等

学校評議員、教職員には、自由記述を含めて印刷して配付した。生徒、保護者には特に印刷して配布する予定はない。HPに4月初旬に掲載する予定である。

4 実施してみたの反省点等

HP掲載内容については慎重に取捨選択し、その方法についても継続的に検討していきたい。

IV 次年度に向けて

1 評価結果の特徴、自己評価実践の成果等

欠席、遅刻が少なく、服装・頭髪面にも気を配り、授業に熱心に取り組んでいるというのが今年度の梁川高校生像ということが出来る。教員側でもチャイムTOチャイムを心がけ、分かる授業、充実した授業を心がけている。本校の特徴のひとつである「学び直し」については、基礎学力や技能を身につけることができるという点から、生徒のみならず保護者や地域に高く評価されるようになってきている。また、環境美化や部活動にも積極的に取り組んでいるとの評価も見られる。

生徒のアンケート結果を年度ごとに比較してみるとほとんどの項目でA・B評価が上昇しており、近年でもっとも好評価となっている。梁川高校は落ち着いている、良い方向に向かっているなどの評価を耳にすることが多くなってきたが、その裏付けとなっているということが出来る。学校全体がよい方向に向かうことで、進路希望についても早い段階で100%を達成することができた。

2 自己評価全体の次年度の取り組みについて

教職員による中間評価・学校改善調査、教職員・生徒・保護者による年度末評価、加えて学校評議員会、学校評価委員会を通してある程度課題や改善点を明らかにすることができた。次年度も今年度同様、引き続き評価や調査を行い、継続的に課題や改善点を明らかにしていきたい。

3 次年度に向けてへの課題、改善点、重点努力事項、展望など

梁川高校では保護者の学校評価アンケートの回収率について課題となってきた。これまでは回収率が低い中で、評価の妥当性が担保できるかとの疑問があった。今年度は学校全体の回収率が80%を超えたことから、保護者の評価について妥当性があると考えても差し支えないと考えることができる。一方で、約20%の保護者がどのように考えているか、探ることが課題である。また、保護者の評価については、生徒と違って必ずしも評価が上昇していない。これは項目によっては、今年度から設定した「わからない」との評価を選択したことにより生じた現象と見ることができるが、次年度は「わからない」を減少させるための努力をしていく必要がある。

教員、生徒が良い関係で学校運営が行われている状況を鑑みたとき、生徒の成長のために次年度は、本校生の多くが苦手とする思考力、表現力、協働する力の育成にも着眼し、教育活動の展開について学校全体で研究していくことも求められるのではないかと感じている。

今後は、学校評議員会での指導・助言、各部・学年・教科で行った年度末反省等も踏まえ、次年度の『学校経営・運営ビジョン』を策定してより良い学校づくりを目指したい。また、策定した『学校経営・運営ビジョン』を生徒・保護者にどのように周知・浸透させるかについても工夫を凝らしていきたいと思う。

4 終わりに

本校は各学年2クラスの小規模校であり、教職員も少ないことから、校務の見直しや部活動の統廃合を行ってきた。小規模校としての本校の位置づけをどのように行うか、地域の住民から本校は何を期待されているのかを常に考え、そのニーズにあった学校づくりを行っていかうと考えている。

地域からの信頼を取り戻しつつある現在、多くの生徒が「梁川高校で学んでよかった」ということができる学校づくりを目指し、今後とも学校評価委員会の意見も加味し、組織的に改善を図っていきたい。また、よりよい学校評価が、教職員の意識を高め、それが組織力を高め、学校力を向上させるものと信じて、更に成果が上がるように努力していきたい。